

中国人記者の被災地取材記

香港フェニックステレビ記者
陳琳



「情報」に 振り回された一週間

助け合い、パニック、政治不信。
華人ネットワーク最大のマスメディアの眼に映った
日本の「震災後」の姿。

Chen Lin

2006年中国人民大学新聞学院メディア学専攻修士課程修了。フェニックステレビに入社し、政治、経済、事件を担当。2008年3月のチベット騒乱後のラサ、台湾での海峡兩岸関係協会と海峡交流基金会による第1回会談、2010年延坪島砲撃事件後の北朝鮮などを取材。

【翻訳】株式会社トランスアジア／（協力）佐藤千歳

壊滅的な被害を受けた宮城県石巻市門脇での取材（写真提供：筆者）

東京から茨城県（北茨城、日立）、福島県（福島、相馬）、宮城県（松島、石巻、仙台）、そして東京へと、三月一日（金）から二六日（土）まで、余震の続くなか、われわ

れは取材のため各地を訪れた。東京を離れ、地震、津波、原発事故の被災地に踏み入ったの取材の日々は、わずか五日間であったが、取材中はとても長い時間に感じられた。

しかし、東京に戻ってからは、「逃げる」ように戻ってきたことを後悔した。

取材陣、放射能パニックの日本へ

日本で地震が発生した後、フェニックステレビ（鳳凰衛視）東京支局の李森記者は日本メディアの内容を収集し、スタジオから生放送で次々と情報を発信した。また、閩丘露薇記者、黄海波記者、宋看看記者の三つのグループは、勇敢にも被災地へと向かった。このうち黄海波記者とカメラマン、衛星放送の技術者はヘリコプターに搭乗して福島上空を撮影中、福島第一原子力発電所の最初の爆発に遭遇した。その画像はその後の番組で繰り返し放送され、フェニックステレビの視聴者に大きなインパクトを与えた。日本の外にいる大多数の人々はその映像によってはじめて、原発事故をまるで自分の身に起こった出来事のように感じ、不安を募らせていった。

私と同僚のカメラマン呉建明は、フェニックステレビの地震報道第二陣として、自分たちの報道で、現場での観察と理性的な考察のバランスをいかにうまくとるか、華人の状況に対する関心と国境を越えた無限の思いやりとのバランスをいかにとるか、さらに日本現地メディアの権威ある、

正確かつで詳細な客観的報道以外に、いかにしてフェニックステレビの優位性や特徴を打ち出すか、といったことを常に考えていた。

三月一八日（金）、私たちは、一人は北京から出発し、一人は香港から出発して、相次いで東京の成田空港に降り立ったが、成田空港はさまざまな国の人々が先を争って日本を離れようとする切迫した状況にあり、私たちはそうした人の流れに逆行して日本に入国することとなった。それはちょうど、原発パニックが深刻な広がりを見せ始めた時期で、私たちが日本に到着する二日前には、中国国内で塩の買占めという理性を欠いた騒ぎが起こったばかりで、CNNでも、ヨウ素剤の正しい服用の仕方、放射能から身を守る方法が次々と報道されていた。空港の出発ロビーは、出国便について尋ねる焦りに満ちた顔があちこちで見られたが、正直に言えば、とりわけ中国人は、まるで世界の終わりを迎えたかのような焦燥ぶりであった。私も彼らの不安は理解できるが、しかし、問題に冷静に、理性的に対応してほしいという気持ちを強く持った。

私たちの最初の報道は、空港にいた中国人の焦りと混乱ぶりにカメラを向けたものとなったが、私は非常に複雑な気持ちだった。中国の多くのメディアはみな、大震災の後

も冷静で秩序正しく行動する日本人に敬意を表す報道をしていた。その一方で、一部の中国国民の行為は同情しがたいものだった。もちろん、中国は大変な災難に見舞われてきた国であるし、人口も多く、人口に比べて食べ物の少ない国であって、多くの物事を少しずつ改善していく必要がある。私たちは、報道を通してフェニックステレビの視聴者に、自分たちと対比してじっくりと考えてもらいたいと思った。一方、日本政府については、なぜ事態に対する判断と表明が外国人から信頼されないのか、私はそれも考えずにはいられなかった。

助け合う人々

一九日（土）、東京で取材を開始したが、ちようど、あちこちで観測される放射性物質の数値が次々と上昇し、日本の国内、国外で「原発パニック」が最高潮に達している頃であった。ずっと屋外で取材を続ける私たちも心配で、カメラマンとともに、会社から渡された放射性物質のモニタリング機能付き腕時計を、ほぼ一時間ごとにチェックしていた。

私たちはおもに渋谷のハチ公交差点を選んで取材を行った。日本の休日のにぎわいが最も典型的に見られるのがこ

こだからである。街頭で募金活動をしていた大学生の宇川洋昭さんは、「避難範囲二〇キロ」という政府の方針を信じてよいものかどうかからず、福島にいる両親のことを心配していた。またある女性は、「原発で五〇人の職員が決死で戦っているのだから、パニックを起こせばかりはいられない。決死でがんばっている人たちを応援しなければ」と言った。街頭での多くの取材のなから、私たちはこうしたコンテンツを選び、ニュースとして放送した。

私たちにとつての最大の収穫は、ある日本の友人が六本木の教会に連れていってくれたことだった。フィリピン政府が教会に助けを求め、福島から移ってきたフィリピンの人たちがその教会に収容されていた。私たちが訪れた当時、教会はそうした多くのフィリピン人を受け入れるかどうか未定であったため、撮影したいという私たちの要求は断られた。ただ、そこで取材したフィリピン人に話を聞いて、「日本政府の放射能漏れに関する情報は信じられない。逃げたい」というコメントがとれた。こうした取材内容や多くの国々がすでに駐日大使館の東京からの撤退を手配したといった背景を加えて、私たちはニュースを通してバランスを取りながらさまざまな状況を明らかにしたいと願った。

また、地震発生後、日本国民の尊敬に値する冷静さと秩序正しさが多く報道されていた。私たちは街頭でのランダムな取材のほか、寿司店を経営する税所伸彦さんと彼の寿司店を重点的に取材し、地震当日に繰り広げられた相互理解と助け合いの感動的な場面を再現したいと考えた。私はカメラの前で、そうした人たちがみな「日本の普通の教育を受けて育った普通の日本人」であったことを話した。でさるだけ客観的な報道を通して、フェニックステレビの視聴者の共感を呼び、人類がともに立ち向かわねばならぬ大災害の前に私たちには何ができるのか、日本のために何をすべきかを多くの人々に考えてほしいと願っていた。

一路、被災地へ

二〇日（日）、私たちは東京を離れ、被災地に入ることになっていった。ところが、私たちがあらかじめ手配していた旅行会社の通訳と運転手に、土壇場で約束をすっぽかされた。私たちは仕方なく、中国の新浪微博（中国版ツイッター）を通して在日一八年になる中国人通訳者、徐競近さんと連絡をつけ、徐さんを通じてなんとカタクシーを一台手配できた。ただ、タクシーの運転手は東京から一二時間だけの運転しかできない、という。ガソリンが足りないとい

うのが第一の理由、第二の理由は会社で運転手一人の労働時間が一二時間を超えないことが定められているからだという。それに、なんといつても運転すればするほど福島第一原子力発電所に近づくのだから仕方がない。

そこで私たちは、まず北茨城に向かうことにした。北茨城は福島第一原子力発電所から約七〇km南に位置し（当時、多くの国際世論では半径八〇km圏外が放射能から安全なエリアとされていた）、津波の被災地でもあった。北茨城に向かう途中、東京から水戸までは高速道路を走ることができたが、水戸から先は運転手がGPSを見ながら、封鎖された多くの道路を避けて進み、北茨城市に到着したのはすでに夜の八時過ぎのことであった。私たちはまず現地の役所に行って許可をもらい、体育館に設けられた避難所の取材に向かった。

避難所では、九一歳になる椿秀楠さんと八八歳の福澤美津江さんの夫婦を中心に報道した。福澤さんが目の悪い椿さんのために卵の殻を剥き、椿さんは福澤さんに笑い話をして聞かせる。中年になってから一緒になったというこの老夫婦の前向きな姿と夫婦愛に、視聴者も深く心を動かされたに違いない。私たちはこのほか、避難所で働く人たちにも取材をして、避難所で下着や防寒着が足りないという



福島市内のビジネスホテルのロビーは他の外国メディアとの情報交換の場となった（写真提供：筆者）

情報を伝えた。ニュースの最後に、私たちは被災地の人々に夜のあいさつをし、被災者の明日のために祈った。被災地に入つての最初の取材は、こうして、人々に対する温かな気持ちのなかで終了した。

取材中、私たちは市役所や避難所で、災害時に広く役立つような経験をいくつも聞いた。たとえば、住民に対してどこで水道や電気が回復しているかを図面で詳細に伝えること、少額貸付のために役所が速やかに保証を行うこと、

無料の賃貸家屋を提供すること、などである。他国の政府の参考になればと思ひ、こうした事項についても私たちはすべて報道した。

困難な「放射能」報道

二一日（月）、最大のニュースは茨城県の水道水とホウレンソウ、福島県の牛乳から基準を超える放射性ヨウ素が検出されたことであつたが、私たちはちょうど茨城県のニュースの現場に居合わせることとなつた。日立市に泊まつた一日目に、私たちは天然ガスを燃料とするタクシーを見つけることができ、その運転手である根本剛さんがその後数日、私たちの「戦友」となつてくれた（私たちが東京まで送り届けてくれた）。

私たちは雨の中、ホウレンソウ畑を見つけた。私は傘もささず、ホウレンソウとともに放射性物質を含む雨に打たれながら、現場でカメラに向かい、手にした線量計の値を読み上げて、数値は六ミリシーベルト／時を超えているが、まだ安全なレベルであることを視聴者に伝えた。また、現場取材を通して、ホウレンソウがなぜ汚染されやすく、他の野菜は相対的に安全で食べられるのかを視聴者に伝えた。実際には、私も放射能が怖くないわけはなかつたが、

前線の記者として、環境は危険な状況にあるのか、それとも安全なのか、本当のことを皆に伝えることが私の責任であった。その責任を果たしながら私は、日本政府が人々に対して責任を持つこと、私のような外来者が放射能の汚染に曝されないようにしてくれることを一番に願っていた。

幸運なことに、北茨城で農民に対してどのような指導を行うのかを取材するため役所に向いたところで、私たちは、現場視察に訪れていた数名の衆議院議員にちようど行きあつた。福田衣里子氏が私たちの取材を受け、「何の落ち度もない農業従事者が巻き込まれないよう、しっかりと仕事をしよう政府に呼びかけろ」と話した。それもまた、私たちが最も関心を寄せる、二次災害発生時の民生の問題点である。

放射能について、私たちは、福島第一原子力発電所から半径二〇kmの警戒ライン周辺から戻ったばかりの衆議院議員、高邑勉氏を取材することができた。高邑氏が現地に三時間とどまった後に検査を受けたところ、数値は正常だったことを報道し、合わせて「南相馬市は多くの人が避難し、残って『がまんしている』のはわずかな人々であり、南相馬市では正常な秩序がすでに失われている」という氏が見てきた現場の様子を伝えた。私たちは、茨城から福島に移

動する際、夜に相馬市を經由し短時間そこにとどまった。その現場でも放射線量の測定数値を報道し、視聴者に現地の実際の放射能レベルを伝えた。

二二日(火)、私たちは福島市を集中的に取材した。日本以外の多くの人々は、福島県、福島市と福島第一原子力発電所の位置関係を知らず、「福島」と聞けばすぐに顔色を変え、恐怖を覚える。前日、現地で発表された放射能の数値は八マイクロシーベルト/時で、日本で二番目に高かった。第一原子力発電所周囲から福島市に避難してきた住民の状況や心情について報道するばかりではなく、私もカメラの前で医療スタッフによる放射能検査を受け、手渡された「健康カード」を視聴者に示して見せた。ニュースではさらに、現場の医師の、「これまでに検査を受けた人は一〇〇人以上いるが、基準値を超えたのは三人だけで、三人とも全身の除染を受けて正常な値に戻った」との話も伝えた。私たちは、報道によって、日本の放射能を正体不明の悪魔のようにとらえる外の世界の見方をなんとか打ち消したかった。

宮城の壊滅的な被害

二三日(水)には宮城県に入ったが、石巻市の沿岸地域

の津波による被害は、私とカメラマンを震撼させるものであった。家々はすべてなくなり、思い出の手がかり、記念の品も何一つ見つけないのでできない人々の前で、自衛隊が震災後一三日目だというのにお生幸存者と遺体の捜索を続けていた。そこでは、放射能や物不足……そうした二次災害は突然色褪せ、すべてを悲しみが覆い隠していた。ここでは、生きていること、それだけです。最高に幸運で贅沢なことだった。

なすすべもない被災民、産業の破壊、悲しみにくれる個人、冷酷な死・行方不明・損失を示す数字。そのときだけは、日本政府や東京電力に対する非難の喧騒、日本の輸出品と大気、海水に対する放射能汚染の恐怖、「日本の弱みにつけ込む」行為の数々や同盟国アメリカからのさまざまな圧力といった震災「後」のニュースから、視聴者の目を大震災の瞬間に引き戻し、人類に降りかかった大災害を前にとともに悲しむ気持ちになることを願った。

東京に戻るまでに、私たちは他にも東北地方の工業の中心である仙台で復興の難しさを目にし、今回の大震災が東北、ひいては日本の工業全体にもたらした傷の大きさに思いを致した。各地の石油不足についても報道し、中継放送の中では絶えず余震の情報を伝えた。屋外では線量計の数

値を随時読み上げて、放射能汚染が軽減している事実を視聴者に伝えた。

短い取材ではあったが、初めて日本を訪れた私にとって、取材は実りあるものとなった。フェニックステレビは世界の多くの土地で華人に影響力を持つメディアである。その報道の量は日本の現地メディアとは比べるべくもないが、多数の記者が日本で懸命に取材に当たり、さらに日本メディアの報道の引用と豊富な評論を加えて、日本国外に對してこの世紀の大災害の様子をしっかりと報道することができたと感じている。私が日本を離れた後、フェニックステレビはさらに羅羽鳴記者ら三人を現場に派遣した。彼らは日本でマグニチュード7の強烈な余震を経験し、重要な場面でフェニックステレビの現場からの声を届けることができた。

日本を離れる際、私は「日本の文明が消え去るようなことがあったら、あまりにも残念なことだ」と述べた。日本政府には国民の信頼を裏切ることなく、責任を持って原発事故の危機の收拾と震災後の再建に取り組んでほしい。それは日本国民に対して責任を果たすことであり、また人類に対して責任を果たすことにもつながる。

日本が一日も早く活気を取り戻すことを祈りたい。 ■